2023/09/20　　聖書研究会

テーマ：コリントの信徒への手紙一について

〇パウロ書簡について

　新約聖書にはパウロの名が冠されている、すなわちパウロが書いたと記されている手紙が 13 書出てくる。そのうち、

・　極めて真筆性の高いもの(パウロが書いたものでおそらく間違いないだろうとされているもの)

→ローマの信徒への手紙、コリントの信徒への手紙一と二、ガラテヤの信徒への手紙、フィリピの信徒への手紙、テサロニケの信徒への手紙一、フィレモンへの手紙の 7 書

・真筆性の低い文書(パウロとは別の誰かがパウロの名前で書いた文書である可能性が高いもの)

→「牧会書簡」として知られているテモテへの手紙一と二、テトスへの手紙の 3 書

・学者の間でも見解が分かれているもの

　(パウロによって書かれたのか、そうでないのかがはっきりしないもの)

→エフェソの信徒への手紙、コロサイの信徒への手紙、テサロニケの信徒への手紙二の 3 書

〇パウロの手紙は新約聖書中で最も古い時期に書かれている。

　(※一番古いのはテサロニケの信徒への手紙一)

・当時のヘレニズム世界にはいわゆる書簡形式で自分の主張を開陳するという文学様式があった。たとえばヘブライ人への手紙、ルカによる福音書、使徒言行録などがそうである。

・しかしパウロの手紙はこのような書簡形式を叙述の手段として用いた書簡文学ではない。それは実用のためであり、今日の私信とはその公的性格において多少の違いがあるとは言え、本来の意味での手紙である。

・したがって書き手と受け手の間にはある特定の関係があり、その関係と関係の中で起こっているある特定の事情、事件を無視してはこれらの手紙を理解することはできない。

　ロマ書の場合…書き手パウロは先方の教会の事情に直接立ち入ることは意図的に避けている。それはパウロが設立した教会ではなく、その未知の教会に対して、その教会にとって未知であるパウロとその福音理解を紹介するという事情があったからであろう。

・しかしコリントの教会とパウロの関係はそれとはまったく異なり、パウロはコリントの教会の人々をよく知り、彼らに対して牧者としての責任を持つと考えていた。コリントの教会内の動き、信仰状態、諸々の問題は、身は離れていてもすべてパウロのもとに知らされ、彼は牧者として問題解決に当たらなければならなかった。その彼の牧会の手段が手紙だったのである。

・その手紙は二千年という時間、また言語、場所を隔てて今日の日本の読者にも大きな意味を持っている。聖書が手紙をその主要内容の一つとしているのは、こうした意味があるからに他ならない。

〇コリントの信徒への手紙一、二
→パウロがコリントの町の教会の信徒へ書き送った手紙

〇コリントの町について
・パウロが宣教した当時のコリントは、恵まれた地理的条件を十分に活かし、国際商業都市として栄えていた。すなわち、コリントはギリシア本土とペロポネソス半島を結ぶ地峡に位置していたため、陸路はギリシアの南北交通の要所であったばかりでなく、東はケンクレア港を通してアジアに開かれ、西はレカイオンによってローマへ開かれる文字通り東西貿易の中継地として海運の拠点となっていたのである。こうした東西・南北の交通路の交差点という恵まれた地理的条件から、コリントはギリシア・ローマ世界の国際商業都市として繁栄していた。商業の他にも陶器製造、真鍮細工、建築などが有名で、コリントに多くの富をもたらしていた。
・コリントの歴史を辿れば、この町は紀元前 7～6 世紀、および 3 世紀に繁栄期を迎えた。しかし紀元前 146 年、アカイア都市同盟(＝古代ギリシア時代後期においてペロポネソス半島北部沿岸部のアカイア人都市同士でなされた同盟)がローマに対して反抗した際に、同盟軍はローマの将軍ルキウス・ムンミウスと戦って敗北し(コリントスの戦い)、同盟は消滅、コリントの町は徹底的に破壊された。この時、男たちは殺され、女性と子どもは奴隷として売られたという。こうして約 1 世紀の間荒廃が続いた。しかし紀元前 44 年、コリントの地理的条件に注目したユリウス・カエサルにより、ローマの植民都市として再建された。再建されたコリントにはイタリアからの自由民の他に、放逐されていたギリシア人、様々の東洋系の人々が集まり、国際都市として人口は急激に増加し、商業都市としての地位も急速に確立していった。紀元前 27 年以後はマケドニアから分離したアカイア州の首都となり、総督の駐在地となったため、さらに多くの人々がローマ帝国のあらゆるところから集まった。人口は自由民が 20 万人、奴隷が 40 万人ほどいたと言われる。ローマ、アレキサンドリア、エフェソなどに続いて重要な都市となった。
・パウロの時代、国際商業都市として栄えるコリントには、東西のあらゆる宗教が混在していたと言う。1896 年以来、アメリカ古代研究所がコリント発掘を行ったが、これにより、コリントにはイシス、セラピスなどのエジプトの神々、シリアの豊穣多産の女神アスタルテー、フリギアの母神、エフェソのアルテミスの神殿などが、ギリシア・ローマの伝統的な神々の神殿と共に存在していたことが明らかにされた。このようにコリント

は人種のるつぼであるばかりでなく、キリスト教信仰からすれば偶像礼拝の氾濫した場所であったと言える。それら偶像礼拝の宗教儀式と港町の繁栄がもたらす倫理的退廃が渾然一体となっていた。ローマ帝国全体の中でも倫理的な乱れが目立ち、「コリントの人だ」と言えば「不品行な人」を、「コリント人のようにふるまう」と言えば「不品行を行う」ことを意味したほどであった。同時代人たちは「コリント化」と称して、コリントの町のこのような傾向を敬遠したと伝えられている。

・しかし、コリントの町がこのように政治的にも文化的にも自由な空気に満ちていたところから、結果的にパウロの伝道は稀に見る成功を収め、その信仰的高揚は先細りを見せることなく、以後、コリントはパウロの伝道の拠点ともなった。

〇パウロのコリント宣教

・パウロのコリント宣教の様子は使徒言行録 18：1～17 に詳しく記されているので参照

・コリントの信徒への手紙一 2：3 で、パウロは自身が初めてコリントを訪れた時のことについて以下のように語っている。

「そちらに行ったとき、わたしは衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした。」

・それは使徒言行録 17：16～34 に記されているように、アテネでの宣教が上手くいかなかったためであろう。一方でユダヤの会堂を中心にして形成されていたディアスポラの(外地の)ユダヤ人社会と、そこを足場に伝道し帰依者を獲得して力を持ち始めたキリスト教徒との間にトラブルが多くなっていた。パウロはマケドニアでもそのような問題に巻き込まれてコリントへと伝道の活路を求めざるを得なかったわけだが、その途中のアテネで宣教に失敗し、教会形成が為されなかったことに心を痛めつつ、これからコリントという繁栄と腐敗の入り混じった町に単身乗り込むということで、パウロの心は大きな不安にさいなまれていたのである。

・しかし、ローマで同じようにユダヤ人社会とのトラブルからクラウディウス帝の勅令によって追放されてコリントの町に来ていたユダヤ人夫婦、プリスキラとアキラとの出会いは、彼らがパウロの同業者(皮テント職人)であり、かつ熱心なキリスト教徒であったことからパウロの伝道活動の大きな支えとなり、ここでもユダヤ人社会とのトラブルを経験しつつも、1 年 6 カ月にわたり宣教と教会形成にあたることを可能にした。

・教会は稀に見る成長を遂げ、上の両人と共にエフェソへ移るまでこの状況は続いた。

・おそらくパウロのコリント滞在は 49 年～51 年にかけてであったと推測される。そしておそらく 54 年春頃にエフェソからコリントの信徒への手紙一は出された。パウロはコリントの教会から離れて後も人づてに、あるいは手紙で多くの情報を得ていただけではなく、そこの信徒たちに対して責任を持っていると考え、人を遣わし、手紙をもって引き続き牧会したのである。

・「いずれにしてもコリントの教会は、パウロの出発後、驚くべく成長し、活動的であり続けた。決して、逆戻りして霊的貧困や不毛に沈んだりはしなかった。しかし、それにもかかわらず、この教会は一つの混乱した像を示している。この豊かさは教会にとってこの上もない脅威となった」。（ポルンカム『パウロ』）
・パウロがコリントの信徒への手紙一を書いた動機もここにある。パウロにとってはコリントの教会の信仰の高まりの中心部に教会そのものを破壊するような深刻な誤りがあり、この問題を放置しておくことができずにパウロはこの手紙を書き送ったのである。

〇パウロが去った後のコリント教会を襲った問題
・教会内部の紛争（1～4 章）、道徳上の乱れ（5～6 章）、キリスト教の自由の誤用（8～10 章）、教会の集会における混乱（11～14 章）、復活理解（15 章）etc.
・しかしこれらの個々の問題の背後に、ギリシアの文化的都市の住民の思考、並びに生活様式と深く関わった信仰理解を持つ、いわゆる熱狂主義者の影響があった。
・パウロはコリントの信徒への手紙一の中でしばしば彼らの自己主張のスローガン、「自分たちは完全な者だ」とか「霊あるいは知識（グノーシス）を所有している」とか「すべてのことは許されている」とかを引用しながら、彼らを批判している。
・このようなパウロの論敵の主張について、荒井献氏はこのように述べている。
「彼らは二元的人間理解から（一五・三以下）死人の復活を否定し（一五・一二）、知恵の言葉の解釈を誇ったものと思われる（一・一七以下）。その結果、かつてパウロの福音を受容した人々は、自らを現在――少なくとも観念的に――終末を先取りして『豊か』な人々と等置し（四・八）、彼らと共に自由（六～一〇章）と知識（八章）を誇示し、礼典（一〇、一一章）と職制（一二章）の秩序を乱し、一種の霊的熱狂主義に陥ったものと思われる（一四章）。キリスト論についていえば、彼らは自らの栄光と知恵にふさわしい『栄光のキリスト』（二・八）ないしキリストの『知恵』を宣べ伝え、彼の死の有意義性を否定した」。（荒井献『初期キリスト教史の諸問題』58 頁）
・このようにパウロの論敵たち（熱狂主義者）は人間としての自己を誇ること、放逸としての自由を主張し、具体的な日常の信仰生活において性的、祭祀的、社会的放逸を引き起こしていただけでなく、弱い者に対する無配慮という問題を引き起こしていた。
・パウロはこれらの問題を教義や倫理的規則を振りかざして断罪するのではなく、あくまでも牧会者として、彼らの主張の中で別の理解を示すことによって正しい福音信仰に立ち帰るようにと諭している。
・1～4 章ではコリントの教会内部で起こっている紛争問題、5～6 章では教会内部の問題、7 章以降では質問に対する回答が述べられている。